

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 四 第 卷 九 十 第

行 發 日 一 月 十 年 三 十 正 大

論 叢

- 獨占の本質……………文學博士 高田 保馬
 地租の不公平可能……………法學博士 神戶 正雄
 道德統計論概説……………法學博士 財部 靜治
 フイアカントの社會學論……………文學博士 米田庄太郎
 世界の貨幣交通……………法學士 作田 莊一

時 論

- 營業稅廢止論を評す……………法學博士 小川郷太郎

說 苑

- 機械と勞賃との相互關係……………經濟學士 山本 勝市
 に就てのマルクスの見解……………經濟學士 山本 勝市
 丁抹の小農地設定事業……………法學博士 河田 嗣郎

雜 錄

- 配偶の有無と死亡率……………經濟學士 岡崎 文規
 爲替の安定か價格の安定か……………經濟學士 谷口 吉彦

機械と勞賃との相互關係についての

マルクスの見解

山本 勝市

目次

- 第一、機械の使用が勞働力の價值を低落せしむることにより生ずる勞賃の低落
- 第二、機械の使用が勞働者の抵抗力を減殺せしむることにより生ずる勞賃の低落
- 第三、機械の使用が勞賃を騰貴せしむるに至る例外の場合
- 第四、勞賃の變動が機械の使用に及ぼす影響

資本家的生産方法の下に於ける生産の目的は利潤の獲得であり、生産の機構は自由競争である。かゝる機構の下にあつて産業資本家が競争の勝利者たり、少くとも劣敗者たることを免れんが爲めには、第一に其の生産する商品の生産費を低減することを期せなければならぬ。今その生産費を低減せしむる方法のうち、直接に勞働に關係するものとしては、凡そ四つの方法があり得

る。勞働賃銀の引下げ、勞働時間の延長、勞働強度の増大、勞働生産力の増加が即ちそれである。然るに前三者には大凡を限度がある故に、力は勢ひ生産力の増加に注がねばならぬ。さうして、この生産力増加の方法として一般に行はれるものは、勞働組織(協力分業の方法)の改善と新たなる機械の使用とである。

今此の論文の目的とするところは、斯の如き機械の使用と勞賃との關係についての、マルクスの考を明かにせんとするに在る。詳しく言へば、機械の使用は勞賃に對して如何なる關係を有するか、又勞賃の變動は新たなる機械の使用に對して如何なる影響を及ぼすか、この二問題について、マルクスは如何に考へて居たかを明かにし、兼て社會主義組織の下に於ける機械の使用についての彼れの見解に及ばんとするのが此の論文の目的である。

なほ説述の順序につき一言して置きたいと思ふ。後に詳述する所であるが、一體マルクスの考によれば、勞働力は一の商品であり、勞賃はその商品の價格であり、而してそはその價值を基準として定まるのである。斯様に、彼は一面に於て勞賃が結局勞働力の價值を基準として定まると主張しつつ、而も同時に他方に於て、現實勞賃の程度を決定する所のものは、勞賃闘争上に於ける勞資相互の力の強弱如何であると説く。此等二個の主張相互の關係については、後に詳しく説明する積りであるが、●兔に角、勞賃を左右する原因として勞働力の價值の變動並びに勞資兩者間の力の關係の變動の二者を認むることは、マルクス勞賃説に於ける最も特色ある點であるを考へる。今本論文に於て機械の使用が勞賃に及ぼす影響を研究するに當つて、機械の使用によつて惹

起せらるゝ此等二個の事情、詳しく言へば、機械の使用が勞働力の價値を低落せしむることに因つて結局勞賃の低落を齎す事情と、機械の使用が勞資鬭争上に於て勞働者側の力を弱めることに因り現實に勞賃を低落せしむる事情とに分けて考察を進めたのは、實は叙上の彼特有の考方を保持したいといふ願に基くのである。

勿論マルクスは勞賃の騰落といふ言葉を色々な意味に於て用ふる。何等かの意味に於て勞賃の増減を意味するには違ひがないが、それ／＼の意味が同一でない。例へば勞賃の低落を來すといふ場合でも、普通に用ひらるゝ如く、絶對的に見た名目勞賃の減少を意味することもあり、又同じ見地に於ける實質勞賃の減少を意味することもある。のみならず彼に特殊なる用法として、剩餘價値と比較しての相對的勞賃が減少することを意味する場合も極めて多い。勞働力の價値の低落に因り勞賃が低落する場合の多くは、此の最後の意味に於て低落するに止まるのであるが、併し必ずしもさうのみとは限らぬ。機械の使用がそれ等の如何なる意味に於て勞賃を減少せしむるやは、その都度之を注意する積りである。

實はこの勞賃の騰落といふ言葉の用法を基本として、例へば名目勞賃を低落せしむるに止まる場合、實質勞賃の絶對額をも減少せしむる場合、乃至は剩餘價値と比較しての相對的勞賃の減少を齎す場合といふ風に區別して、機械使用のそれ／＼の意味における影響を研究したいとも思つたけれども、それでは却つて、右に述ぶる所の勞賃説についての彼特有の考方をば、明瞭に保持し難くなるために、こゝには敢て之を採らなかつたのである。

第一 機械の使用が勞働力の價值を低落せし

むるここにより生ずる勞賃の低落

マルクスの考ふる所によれば、機械の使用は概して勞賃を低落せしむる傾向を有するものであるが、(例外に屬する場合は後の第三節に述べる)、それは既に述べたやうに、二つの場合に分かつことが出来る。その一は、機械の使用が勞働力の價值そのものを低落せしむることより生じ、その二は、機械の使用が勞働者の抵抗力を減殺せしむることより生ずる。私は順序として、先づ第一の場合を本節に述べ、第二の場合は之を次節において述べるであらう。

今日廣く知られてゐるやうに、マルクスによれば、勞賃は勞働の價格ではなくて勞働力の價格である。而して勞働力の價格たる勞賃はその勞働力の價值を基準として定まるのである。

『勞働(勞働力の意)の市場價格は、長期の間には、その價值に順應する。だから一切の高低にかゝはらず、又勞働者が如何なることをしやうとも、彼は平均に於ては、只彼れの勞働(力)の價值………を受取るだけである』¹⁾

斯様に勞働力の市場價格即ち現實の勞賃は、その價值に順應するのである。だから勞賃は勞働力の價值が低落すれば勢ひそれに順應して低落しなければならぬ。然るに機械の使用は勞働力の價值を低落せしむることがあり得るのである。それは如何なる場合であるか。

先づ第一には勞働者の生活必需品の生産部門に於て機械が使用せらるゝに至る場合である。や

1) K. Marx: Value Price and Profit, national labour press, p. 48 (河上博士譯一七〇頁)

はり今日廣く知られてゐるやうに、マルクスによれば、勞働力の價値は、他の一般商品の價値に於けると同様、之が生産のために社會的に必要とせらるゝ勞働量（その量は勞働時間によつてはかる）に於て定まる。然るに人間の勞働力といふ商品は、他の一般商品の場合と異なり、之が生産のために直接消費せらるゝ勞働といふが如きものは存在しない。そこで勞働力の價値の實質をなす所の勞働とは、結局勞働者の生活資料を生産するために、社會的に必要とさるゝ勞働である。もつと嚴密にいふと、勞働者の日々の生活必要品の價値に加ふるに、更に勞働力を發達させる一定の熟練を習得せしむるために要する若干の價値を以てしたものである。

斯様なわけであるから、今勞働者の生活必要品の生産部門に於て新たなる機械が使用せられ勞働の生産力が増大せる結果、従來勞働者の一日の生活必要品を生産するに六時間を要したるものが、今や四時間で生産し得らるゝことになれば、勞働力の價値はそれだけ低落する。従つて勞働もまた、結局はそれに順應して低落せざるを得ぬわけである。なほ同様の結果は、生活必要品の生産に用ふる生産手段の生産に機械が使用せらるゝに至れる場合にもまた生ずる。蓋し生産に費されたる現在の勞働のみならず過去の勞働もなほ價値の實質を形成するものだからである。

たゞこゝに注意すべきは、かゝる場合に於ける勞賃の低落は決して實質勞賃の絶對的減少を意味するものでないといふことである。それが低落するといふのは、名目勞賃の減少と、資本家の得る剩餘價値に比較しての相對的意義に於ける勞賃の低落とを意味するに外ならぬ。マルクスは此の點を明瞭に述べて居る。

『勞働の生産力の増加したお蔭で日々の平均必要品の同じ額が三志から二志に下落し、日々の必要品の價値に相當する對價を再生産するに勞働日の中六時間を要したものが僅に四時間で済むといふ様な事がありうる。此の場合には勞働者は以前三志で買ひ得たのと同じだけの必要品を二志で買ひ得るだらう』

、『(この場合)勞働者の絶對的の生活標準は依然同じだが、(只)彼れの相對的勞賃従つて又資本家のそれと比較しての彼れの相對的社會地位は(以前に比して)下落するであらう』²⁾

なほ又、かゝる場合に資本家は勞賃の引下げをやらうとするものであり、又實際に勞賃は低落するものでもある——その實例をマルクスは英國の穀物條例廢止後の十パーセントの勞賃引下げに³⁾とる——が、併し此の場合勞賃は必ずしも價値と同じ程度迄低落するとは限らぬ。資本家の壓力と勞働者の抵抗との如何によつては勞賃は勞働力の價値以上の色々な點に止まり得る。『資本』中にこの事をば次の如く述べて居る。

『例へば勞働生産力の増進したる結果、勞働力の價値は四志から三志に、或は必要勞働時間は八時間から六時間に低落する時、勞働力の價値低落は單に三志八片なり、三志六片なり、三志二片なり迄に止る場合がある……。此の勞働力の價格の低落——その最低限界は三志——の程度は、一方からは資本家の壓迫、他方からは勞働者の抵抗が秤皿に投入する相對的重量に懸るものである』⁴⁾

此の例に於て勞賃が若干でも三志以上に止まる限り、勞働者の絶對的生活程度が以前に比して

2) Value Price & Profit, p. 42 (譯一五六頁)

3) Ibid, p. 43 (譯一五七頁)

4) Das Kapital, Volksaus., S. 459. (高島氏譯第一卷第二册四二九頁)

高まるといふことは論を俟たぬ。

機械の使用が勞働力の價値を低落せしめ、因つて以て勞賃の低落を齎すべき第二の事情は、機械の使用が熟練勞働を化して簡單な勞働たらしめるといふ事情である。

前にも述ぶる如く、マルクスは、勞賃を以て勞働力の價値を基準として定まるとなすのであるが、さて此の勞働力の價値を構成する所のものは、勞働者及其の家族の日々の生活を維持すべき生活必要品の價値のみならず、更に「彼れの勞働力を發達させ、一定の熟練を習得するために費されなければならぬ他の分量の勞働」をも包含しなければならぬのである。

斯様に勞賃の基準たるべき勞働力の價値のうち、勞働力を發達熟練せしむるための勞働が含まれて居る以上は、簡單なる勞働力はより熟練を要する勞働力よりも、その價値は小なりと言はねばならぬ。然るに機械の使用は漸次勞働を簡單化しつゝある。勿論我々は社會の平均的勞働について考へるのであるが、その平均的勞働の性質が機械の使用によつて、複雑熟練のものより、だん／＼簡單未熟練のものに變化しつゝあるのである。即ち「普通勞働者を比較的過剩たらしめつゝある所のこの同じ發達(機械の發達を指す)は、正に他方に於ては熟練勞働を簡單化し、かくて其の價値を低減せしめつゝある」のである。

斯様にして機械の使用は勞働を簡單化することによつて、その價値を低落せしめ、従つて結局勞賃を低落せしむるものである。然るに此の場合に於ける勞賃の低落は、前にあぐる所の生活必要品の價値の低落に基づく場合と異なり、熟練教育のために要する價値の不要に基づくのであるか

5) Value price & profit, p. 30 (譯一三〇, 一三一頁)
6) Ibid, p. 52 (譯一七七頁)

ら、それだけ生活程度は絶對的にも低下したといひうるであらう。剩餘價值と比較しての相對的意義に於て低下せることはいふ迄もない。

機械のかゝる作用は直接に勞働人口を増加するものであるが、加之機械が筋肉力の必要を省くといふ事情と相待つて、婦人及び幼年勞働者の参加を可能ならしめ、由つて勞働人口を増加し、又、夫婦子供共稼ぎの可能は早婚を促すことによつて更に勞働人口を増加する。而してそれ等勞働人口の増加は畢竟勞賃を壓迫する事情となるものであるが、それ等は項を更めて述ぶべきことで、こゝに述ぶる所と直接の關係はない。

第三に擧ぐべきは、機械の使用は婦人及び幼年勞働を参加せしむることに因り、成年勞働者の勞働力の價值を低落せしめ、従つて又その勞賃を低落せしむる事情である。

すでに述ぶるが如く、機械の使用は平均勞働を簡單化するに止まらず、なほ生産的勞働に於ける人間の筋力の必要を省くものであるが、此の故に、手工業、マヌファクトール時代を経て機械生産の時代に入るや、資本が先づ以て要求せし所のものは、婦人及び幼年の勞働である。即ちマルクスの言葉を借りて言へば、『機械の使用は性と年齢との區別なく家庭の全員をあげて賃勞働者とするに至つた』のである。

此事實に伴ふ結果は色々あるが、こゝに指摘せんとするは、家族の全員を擧げて賃勞働に従事せしむることに因つて、成年男子の勞働力の價值を減少せしむることである。すでに幾度か繰返せる如く、勞賃の基準たるべき勞働力の價值は、その勞働力を再生産するに要する價值のこと

で、即ちそれはその労働する當人の生活のみならず、その家族の生活のためにも必要な資料の價值を含まねばならぬ。然るにこゝに注意すべきは、或る成年男子の勞賃が以て家族全員の生活を維持するに足ることを要すといふときは、家族全員の生活が、社會一般に、その成年男子のみの勞賃によつて維持せられ居ることを假定せることである。従つて今假りに妻も子供も賃労働に従事することになれば、労働力の再生産に要する生活資料の價值は、より多數の人間によりて分擔せらるゝこととなり、成年男子の勞賃は以て家族全員の生活を維持するに足るの必要なに至る、即ちその労働力の價值は低落し従つてその價格もまた低落すべきである。勿論此の場合家族全員の勞賃を合計したるものは、従來の成年男子のみの勞賃に比較すれば、その絶對額は實質的にも騰貴し得るであらう。併し此の場合一人の労働日は數人の労働日に代られたのであるから、たとひその場合でも剩餘價值に比較しての相對的勞賃は低落を免れぬのである。換言すれば、成年男子の實質勞賃は、絶對的にも相對的にも減少し、それを全員の勞賃總額と比較すれば、絶對的には増加し得るが、相對的には常に減少するのである。

マルクスの此點に關する説明は次の如くである。

「労働力の價值は單に個々成年男子の維持に必要な労働時間によつてのみでなく、又労働者家族の維持に必要な労働時間に依つて決定されるものであつた。機械は労働者家族の全員を労働市場に投入れることによつて、主人の労働力の價值をその一家中に分割する。斯くて機械は彼れの労働力の價值を引下げるのである。例へば四箇の労働力に區分される一家族を購買

するには、以前その戸主の勞働を購買した場合に比べると、恐らくは、より多くの費用を要するであらう。併し其代り、勞働日に代つて今度は四勞働日があらはれて來る。そしてこの四勞働日の價格は、一勞働日の剩餘勞働に對する四勞働日の剩餘勞働の超過に比較すれば低落するのである。』

第一 機械の使用が勞働者の抵抗力を滅殺せ

しむるここにより生ずる勞賃の低落

マルクスによれば、既に屢々述べたやうに、勞働力の價格は他の一般商品の價格と同様その價值を基準として定まる。けれども勞働力の價值そのものは他の一般商品の價值とは異なる若干の特徴を有するのである、その特徴とは何であるか。彼自身の説明は次の如くである。

『勞働力の價值又は勞働の價值には若干の特徴があつて、總ての他の商品と區別する所がある。勞働力の價值は二つの要素——一は單に生理的のもの、他は歴史的又は社會的のもの——によつて形成せられる。其の窮極の限度は生理的要素によつて決定せられる。言ひ換ふれば勞働階級はそれ自身を維持し且つ再生産し、其の生理的存在を永續して行くために、生存及び生殖に絶對的に缺くべからざる必要品を受取らねばならぬ。だから此等缺くべからざる必要品の價值は勞働の價值の限度を形成る。他方に於て勞働日の長さは又、窮極の、尤も可成り屈伸性に富んだ限界によつて制限せられる。その窮極の限度は勞働する人の生理力によつて定まる。……此限界は甚だ屈伸性に富んで居る。不健康な且つ短命なゼネレーションを急ぎ目に續け

て行けば、元氣な且つ長命なゼネレーションの系列と同じ様に勞働市場を維持して行くことが出来る。二つの單なる生理的要素に加へて勞働の價値は如何なる國に於ても因襲的な生活標準によつて決せられる。それは單なる生理的生活ではなくて人々がその下に置かれ且つその下で育てられる處の社會的諸條件から出て來る一定の慾望である』⁹⁾

即ち勞働力の價値が二つの要素——自然的及び社會的——から形成せらるゝことを以て、彼が勞働力といふ商品の價値が他の一般商品の價値から區別さるべき特徴となすのである。思ふに彼の考によれば、一般商品の價値は一定の時一定の社會については一定不變の分量であるが、勞働力の價値ばかりは、自然的要素に加ふるに歴史的社會的要素がその形成に與つて居るが爲めに、一定の時一定の社會に於ては一定しては居るが、それは不變なるが如く一定して居るものではなくて、可變なるが如く一定せる分量であるといふ點が特徴だといふのであらう。右に引用せる所に引つゞいて次の如く言へるに徴しても、私には左様に考へられるのである。

『英國の生活標準は愛蘭の標準に引下げられ、獨逸の百姓の生活標準はリヴオーニアの百姓のそれに引下げられ得る』¹⁰⁾

『勞働の價値の中に這入り込む所の、此の歴史的又は社會的要素は、擴げること出来れば縮めることも出来る、或は生理的限度しか何物も残らぬやうに、全く無くして仕舞ふことも出来る』¹¹⁾

既に勞働力價値の形成要素の一つが『擴げること出来れば縮めることも出来る』といひ、又結

9) Value Price & Profit, p. 48-49 (譯一七一頁、一七二頁)

10) Ibid, p. 49 (譯一七二頁)

11) Ibid, p. 49 (譯第一七二、第一七三頁)

局勞働力價値を意味すべき『生活標準が……引下げられ得る』といふ以上は、價値そのものが一
の可變量でなければならぬ。私は可變量といつたが嚴密にいへば、恐らく生理的要素といふ窮極
の限度の中に於て可變なる量といふべきであらう。

以上の解釋にして誤なしとすれば、マルクスは、勞働力の價値それ自身が一の『擴げること
出來れば縮めることも出來る』と考へたのであるが、加之彼は現實の勞賃を以て屬するその價値か
ら乖離し得るものと考へたのである。而して價値それ自身の變更にしる、その價値からの乖離に
しろ、兎に角現實勞賃の程度の確立は勞働資本兩者の間に於ける絶えざる闘争によつて決せらる
ゝことゝなしたのである。

この現實勞賃が資本勞働兩者の闘争によりて決せらるゝといふ思想は、彼の著書の隨所にあ
はれて居る所であるが、その一例を『價値價格及利潤』の中にとれば次の如くである。

『利潤の最高限は勞賃の生理的最低限と、勞働日の生理的最低限とによつて制限せられる。
利潤率の最高限の二つの限度間に於て、變動の廣大なる等差が可能だといふことは、言を俟た
ない。その現實の程度の確立は只資本と勞働との間に於ける絶えざる闘争——資本家は勞賃を
ば其生理的最低限に引下げ、さうして勞働日をば其の生理的最低限に延ばさうと絶えず努めて
ゐるのに、他方勞働者は之と反對の方向に絶えず歴してゐる——によつてのみ決定せられる。
事は闘争者相互の方の問題に歸する』¹²⁾

事は闘争者相互の方の問題に歸するのである。すでに勞賃を結局規律すべき價値の低落が機械

12) Value Price & Profit, p. 50(譯一七四頁)——“The matter resolves itself into a question of the respective Powers of the Combatants.”

の使用によつて惹起さるゝ種々なる事情をしらべた私は、更に機械の使用が資本勞働兩者の闘争の力——それは現實勞賃の程度を決する所の——の上に如何なる影響を持つかを研究しなければならぬのである。

(A) 新たなる機械の使用が勞働者人口を過剰ならしむることにより勞働者側の抵抗力を減する場合

勞働者を雇入るべき資本に比し勞働人口が過剰となることが勞賃闘争に於ける勞働側の力を弱め、反對に資本側を有利な地位に導くことは言を俟たぬであらう。私はかゝる意味に於て機械の使用が勞働人口を過剰ならしむべき事情として、次の二つを擧げ得る。

先づ擧ぐべきは、機械の使用が、既に指摘したやうに、勞働の簡單化及び筋肉の省略を來すことによつて勞働人口を著しく増加するといふ事實である。この勞働人口を増加するといふ事實は、たゞそれだけですでに勞賃闘争上勞働者側の力を薄弱ならしめる事情と言はねばならぬ。

第二に述べべきは、機械の使用が所謂産業豫備軍を造出することにより勞賃を壓するといふ事實である。いふ迄もなく此の點はマルクス勞賃説のうち最も特色を有する點の一つであるが、併しそれだけ又學界に紹介論議せらるゝ事も多い。我國に於ては、最近には森學士が『マルクス勞賃論』¹³⁾の中に可成詳しく紹介された、従つて多少重複する所もあるが、私は私自身の立場からこゝに若干の紹介をしたいと思ふ。

『勞働要具は機械の形態を取つた時、直ちに勞働者との者の競争者となる』¹⁴⁾とマルクスはいふ。

13) 經濟論叢、大正十三年五月、六月號、

14) Das Kapital, Volksaus. S. 374 (譯第一卷第二册二四四頁)

機械の使用が勞働者を勞働市場から驅逐することは争ふべからざる事實である。

今資本總額に變化を來さざる場合即ち單純再生産の行はるゝ場合を假定して以上の命題を明にするであらう。

例へば今一資本家が一の壁紙製造所に於て一人に付年々三十磅の割合で百人の勞働者を使用すると假定せよ、然らば彼れが年々支出する可變資本は三千磅となる。彼れは五十人の勞働者を解雇し、一千五百磅せる一機械で殘餘の五十人を使用するとする。説明を簡單ならしむるため、しばらく建物石炭等は無きものと見る。なほ年々消費される原料は依然三千磅と假定せよ、然らば結果はどうなるであらうか。前には六千磅といふ資本總額は半分は不變資本に半分は可變資本として勞働者の雇入のために、用ひられて居たものが、今や機械を用ひたる結果四千五百磅(原料三千磅機械が千五百磅)が不變資本となり、一千五百磅が可變資本となり、可變資本部分は總資本の半分から四分の一に減する。右に述ぶるが如き關係で、資本總額に變化なき場合に於ては、可變資本は絶對的にも相對的にも減少し、「他の事情に變化なき限り六千磅の資本は今では決して五十人以上の勞働者を使用することは出來ぬ」¹⁵⁾のである。かくて「機械の改善が行はれる毎に、其資本が使用する勞働者数は益々減少する」¹⁶⁾のである。

右の場合と異なり、使用される機械に要する費用が驅逐される勞働力及び道具の總費用よりも少なき場合、たとへば機械の費用が一千磅にすぎざる場合に於ては、五百磅の資本は機械の使用によつて遊離せられ、一方で驅逐せられた勞働者に對する雇入資金となりうるであらう。然るに

15) Das Kapital, Volksaus. S. 282 (譯第一卷第二册二六一頁)

16) a. a. O. S. 282 (譯同上)

年勞賃三千磅に變化なしと假定すれば、それは約十六人に對する雇入資金たり得るにすぎぬ。否五百磅が資本化する場合に一部は再び機械のために費されなければならぬ故に、それは十六人よりも遙に少數を雇入れうるに過ぎぬ筈である。

斯く説くことによつて、マルクスは『勞働者を驅逐する總ての機械は、いつも其れと同時に、また必然的に、其同じ勞働者の使用に相當せる一資本を遊離する』と主張する所の彼の『デュームスミル、マカロツク・トレンス、シニョーア、ジョンスチュアートミル等の如きブルジョア經濟學者の全列』¹⁷⁾に向つて反對して居るのである。

勿論右の場合、使用せらるゝ新たなる機械の製造に向つて、より多數の機械工が雇入れらるゝに至り、その機械によつて驅逐せられし勞働者のすべてを吸収しはしないかとの疑念が起り得る。マルクスは決して此の事實を看過したのではない、併しこの疑念に對しては次の如く答へて居るのである。

『新機械の製造には、高々、其機械の使用に依つて驅逐されるよりも少數の勞働者が使用されるゝに過ぎぬ。(何故といふに)解備された壁紙製造工の勞賃を代表したにすぎぬ一千五百磅といふ金額は、今や機械の形に於て(一)其機械の製造に要する生産機關の價值と(二)其機械を製造する機械工等の勞賃と(三)彼等の主人の有に歸する剩餘價值とを代表する。更に機械は一度出來上ると其死に至るまで更新さるゝを要しないのである。故に追加人數の機械工を永續的に使用するには(機械が永續的に需要さるゝを要するから)順々に他の壁紙製造業者が絶えず機械によつ

て勞働力を驅逐するを要するのである」¹⁸⁾

以上は資本總額に變化なき場合に於ける機械が勞働者を驅逐する作用であるが、進んで資本蓄積の行はるゝ場合に於ける同様の作用を研究しなければならぬ。蓋し利潤を目的とし、自由競争を機構とする資本家的生産方法の下に於て、單純再生産はたゞ思想的にのみ考へうるにすぎず、事の實際は擴張再生産即ち資本の蓄積であることは言を俟たぬ。

さてすでに述べた所の、機械の使用が勞働者を驅逐するといふ事實は、單純再生産の行はるゝ場合たると、資本蓄積の行はるゝ場合たるとによつて區別のあるべき筈はない。たゞ前の場合にあつては可變資本の減少不變資本の増大は絶對的にも相對的にも事實なるに反し、後の場合にあつては、蓄積の勢が極めて強きときは、新資本の追加によつて可變資本の絶對量は増加し、従つて舊資本によりて使用せられ、機械によりて驅逐せられた勞働人口が全部新資本によつて吸収せらるゝ事があり得るといふにすぎぬ。例へば資本價值が最初は不變部分五〇可變部分五〇といふ割合に分割せられ、後には不變部分八〇可變部分二〇といふ割合に分割せらるゝに到つたと假定せよ、可變部分は總資本又は不變部分に對し相對的に見れば、明に減少して居る。けれども假りに總資本が最初に拾萬圓なりしもの、後に參拾萬圓に増加したとすれば、可變部分の絶對額は壹萬圓だけ増加した譯である。かくの如き場合には、勞働者の數がもとのまゝであれば、勞働力に對する需要の増加となり、従つて勞賃闘争上勞働者側の力を加ふべきは明である。

然るに右の如き場合は極めて例外に屬するので、一般には資本の有機的組成の變化は資本の蓄

積よりも、その歩調が速いのである。

『生産力の増進従つておこる資本の有機的組成の變化は、たゞに蓄積又は社會的富の増加と、歩調を俱にするのみならず、その歩みは遙に速い。蓋し單純蓄積或は總資本の絶對的增加には集中即ち個人資本の集中が伴ひ新たな資本の技術的革命は古い資本の同じ技術的革命を齎すからである』¹⁹⁾

即ちマルクスによれば、蓄積は集中を伴ひ集中は新たな技術的革命を促し、よつて資本の有機組成の變化、換言すれば可變資本部分の相對的減少の勢は、蓄積の勢よりもより速いのである。而してその結果は益々多數の勞働者を勞働市場より驅逐し、所謂産業豫備軍を増加せしむるに至るのである。斯様に、マルクスが産業豫備軍と呼ぶ所の過剩勞働人口は、生産力の増進に伴ふ可變資本の相對的減少といふ『資本主義的生産方法に特有なる人口法則』の結果であるから、恐らく彼は人口の自然的増殖の事實を全然無視したのではあるまいと思ふが、併し彼の言葉を借りて言へば、かゝる過剩人口は『現實の人口増殖とは無關係に造り出される』²⁰⁾のである。

さて以上の如き理法によつて造出さるゝ所の産業豫備軍は、勞賃に對して如何なる關係を有するかといふに、簡單に之をいへば、近世産業上の特質たる景氣の循環に際し、好景氣時には、この過剩人口は狩出されて現役軍の勞賃引上の運動力を弱め、不景氣になれば再び路上に驅逐せられて豫備軍を形成し背後より現役軍の仕事を窺ふことによつて、後者の勞賃引下げに對する抵抗力を弱めるといふのが彼れの見解であると考へる。彼れ自身は此の事を次の様な言葉で説いて居

19) Das Kapital, Volksaus., S. 566—567 (譯第一卷第三册一三五頁)

20) a. a. O., S. 570 (譯同册一四一頁)

る。

『産業豫備軍即ち相對的過剩人口は不景氣のとき、通常景氣の時には現役勞働軍を壓迫し、過剩生産及び發作的活氣のときには現役勞働軍の要求を抑制する。故に相對的過剩人口は勞働需給の法則が依つて運動する背景であつて、此法則の作用範圍をば、資本の榨取熱及び支配慾に絶對的に適合した制限内に閉ぢ込める』又曰く

『概して勞賃の一般的運動は、産業循環の周期的變動に應ずる所の産業豫備軍の伸縮に依つて専ら調節される。隨つてそれは勞働者の絶對的人口數の増減に依つてはなく、勞働者階級が現役軍と豫備軍とに分割さるゝ比例の變動、換言すれば過剩人口の相對的範圍の増減即ち過剩人口が或は吸収され或は遊離せられる程度によつて定まるものである』²¹⁾

(B) 婦人及び幼年勞働者が勞働者側の力を弱める事情

現實勞賃の程度の決定は勞資兩者の力の問題に歸する、といふマルクスの考へに關して、機械が勞働の供給を過剩ならしむる事によつて勞働者側の力を弱むる事情を、私は、以上を以て、可成詳しく述べた積りであるが、勞働者側の力を弱むるかゝる事情の外に、機械の使用は、なほ別の事由によりて同様の影響を有する。それは機械が婦人及び幼年勞働を參加せしむることによつて、文字通りに鬭争力を弱むる事實である。即ち『結合勞働總員への幼年及び婦人の壓倒的附加によつて、機械は遂に、成年男工がマヌファクトール時代に於て尙ほ資本の壓政に對して有して居た抵抗力を打破する』²²⁾の下である。

21) Das Kapital, Volksaus., S. 576 (譯第一卷第三册第一五四頁)

22) a. a. O., S. 574 (譯第一卷第三册一五〇頁)

23) a. a. O. S. 346 (譯第一卷第二册一四八頁) なほ S. 347 頁參照

第三 機械の使用が勞賃を騰貴せしむるに

至る例外の場合

以上述ぶるが如き諸事情により、『資本家的生産の一般的傾向は、勞賃の平均標準を高めるのではなくて却つて低める』²⁴⁾ものではあるが、併し機械の使用も、例外的には、反對の作用を及ぼす場合がないではない。マルクス自身は決して、機械の斯様な作用を看過することをしなかつたので、以下述ぶる所は、彼がこの點に關して『資本』第一卷第三八六頁以下に列擧せるもの、大様である。

一、一産業に於て機械使用が擴大すると共に、先づその産業に生産手段を供給する他の諸事業に於て生産が増進し、勞働力のより多くが需要せらるゝに至るものである。

先づ第一に、機械の使用と共に一の新たな種類の勞働者に對する需要が生れる。機械の生産者が即ちそれである。この事は説明を俟たずして明であらうが、第二に、機械の使用は、勞働の生産力を増加し、従つて通常その機械を使用する産業部に於ける生産物の總量を増加するものである。それ故に他の事情にして變化なき限りは、それに順應して、其の原料の生産に従事する勞働者の數をも亦、増加すべきである。例へば木綿紡績機械の發明使用は木綿の生産量を増加するものであり、その結果はより多量の原料綿の必要を來し棉花栽培の方面に於てより多くの勞働者を要求するが如くである。

二、一の勞働對象が其の最終形態に到る間に通過せねばならぬ所の豫備的又は中間的段階が、機械に侵される時は、勞働材料が廉くなるといふ理由によつて、今尙手工業的又はマヌファクツールの的に經營せられつゝある所の、機械製品の供給を受くる諸産業に於て、勞働需要は増加する。例へば綿糸の製造に機械が使ひらるゝに至ると、綿糸は廉くなり、従つて最初のうちは織手が原料費を増加することなくして生産を増加する事を得てその収入を増加し得る。だから之に伴つて新たに織物業に従事するものが増加し、此の方面に於て勞働需要は増す譯である。

三、贅澤品の製造工及び僕婢階級に對する需要は増加する。機械を使用する直接の結果は、剩餘價値の増大及びそれと同時に剩餘價値の依つて表現せらるゝ所の生産物量の増大、隨つて資本階級並にその附隨者が消費する物質と共に此社會部層そのものゝ増大である。此の資本家階級の富の増殖とその生活必要品の生産に要する勞働者數の絶え間なき相對的減少とは、新たな贅澤慾をおこさしめ、隨つて之を滿すべき新資料を造出せしむるに至る。一言にしていへば贅澤品の生産を増加せしめ、よつてその方面に新たな勞働需要を齎すのである。なほ之と全然同一の理由によつて、機械の使用は、勞働階級の一部をば、僕婢階級の名の下に、たえず大規模に需要するのである。

四、機械の使用は生産部門の多様性を増加し、マヌファクツール時代に比べて著しく社會的勞業を進歩せしめる。而してその結果は經濟交通の範圍を擴大し、かくて運輸業の發展を促すと共に、その部門に勞働需要を増大するものである。

五、勞働者數の相對的減少を伴ふ生産機關及び生活資料の増大は、運河船渠隧道橋梁等の如き、只遠き將來に於てのみ實をおさめ得べき諸事業を可能ならしめ、その方面にも勞働需要の増大を來す。

六、最後に、直接機械の基礎の上にか、或は又機械に伴ふ一般的勞働革命の基礎の上にか、その何れかの上に從來見ない所の新たな生産部門が成立する。而してその部門に新たな勞働者を需要する。而してマルクスに従へば此種の産業として『現在にては、瓦斯製造業、電信、寫眞、汽船、鐵道等を擧げることが出来る。』

以上、繁雜を顧みず、マルクスの述ぶる所に多少の區分を施して、之を列擧した。それ等は機械が勞働需要を増加する諸事情であり、従つて勞働者側に力を添へる場合である。マルクスが斯様な場合を十分に顧慮せるに不拘、なほ産業豫備軍の造出てふ一の歴史的人口法則を認むることにより、勞賃平準低下の一般的傾向を提唱せしことは、すでに繰返し述べたる所である。

第四 勞賃の變動が機械の使用に及ぼす影響

以上三節に於て述べたる所は新たな機械の使用が原因となつて勞賃が騰落する事情であるが、本節に於て説く所は勞賃の騰落が原因となつて機械の使用範圍に影響する事情である。

既に述ぶるが如く、資本家的生産方法の下に於ける生産者の本願は、より大なる利潤を得るごいふことである。従つて此の組織の下に於て生産の方法に關して何事か考慮せらるゝ場合、それは常に第一に此の見地からなされる。機械を使用するや否やを決する標準もまた、同様に、その

使用によつてより大なる利潤をおさめ得るや否やの點にある。

斯様な見地に從つて、如何なる場合に機械が使用せらるゝかといふ事を考へて見るに、機械を得る費用が機械の使用によつて省き得る勞働者の勞賃と比較せられて、前者が後者よりも、多少でも少いといふ場合にのみ、その機械採用の可能性は存するであらう。今理論を簡單にするがために、勞働力も機械も、共にその價值に於て賣買せられると假定すれば、機械使用の可能性は**資本の論議へ歸せらるる勞働力の論議**といふ場合にのみ存することになる。マルクスが次の如く述べたるは、正に此意に外ならぬ。

『資本家は使用された勞働の價值を支拂ふのではなく、使用された勞働力の價值を支拂ふものであるから、資本家にとつて機械使用の限界は、機械の價值と機械によつて省かるゝ勞働力の價值との差によつて設けられる』²³⁾

同一の機械が、或る國に於ては使用せられるのに、他の國では全々使用せられなかつたり、又同じ國に於ても、勞賃の騰貴が甚しければ甚しいだけ、益々機械の使用が増加するが如き事實は、右の理論の實現に過ぎぬであらう。

右は資本家的生産方法の下に於ける勞賃の機械使用に及ぼす影響であるが、今もし社會組織が社會主義の原則を採る時は、機械使用の限界は如何になるであらうか、此點を研究して資本家的生産方法の下に於けるそれとを比較するであらう。

勿論社會主義組織の下に於て機械の採否を決定するに當つては、色々な事が考慮せらるゝであらうけれども、生産物を得るについての人類の犠牲をなるべく少くする事は先づ以て考慮せらるゝ

23) Das Kapital, Volksaus., S. 337 (譯第一卷第二册一六三頁)

る事の一つであらう。而も所謂犠牲とは階級社會に於けるが如き一部の階級から見た犠牲ではなく廣く社會全體から見ての犠牲であるから、それは畢竟生産的勞働といふことに歸するであらう。即ち人類から生産的勞働の苦痛を省くといふことが、機械使用の第一の主眼となるであらう。

かゝる理由により、私はマルクスの次の言葉を以て、社會の組織が社會主義の原則をとする場合における機械使用の一限界を示すものと解する。

『機械使用を専ら生産物を安價ならしむる手段として觀察する時は、機械使用の限界は機械其物の生産に要する勞働が其使用によつて省かれる勞働よりも少いといふ點に存してゐる。』²⁶⁾即ちこの場合における機械使用の可能性は *蒸氣の動力入るから、勞働(の動力)なる場合に存* することになる。

然らば資本家的生産方法の下に於けると、社會が社會主義の原則を採れる場合に於けると、機械使用の限界にどれだけの相違があるか、

マルクスは資本論第二版に註して『されば共産的社會に於ては、機械はブルジュア的社會に於けるとは全く異なつた一活動領域を持つであらう』²⁷⁾といつて居る。そは何故であらうか。いふ迄もなく、マルクス説によれば、勞働と勞働力とは別個のものである。而して勞賃は勞働力の價格であつて勞働の價格ではない。勞働者が資本家に向つて給付する所のものは勞働である。然るに彼等が資本家から受取る所のものは、勞働力の價值であつて、給付せる勞働から見れば、單にその一部分に過ぎない。其の殘部が利潤として資本家に歸するのであるが、前にも述ぶる通り、資本家的生産方法の下に於ける生産は、利潤を目的として行はるゝものであるから、原則として利

26) das Kapital, volksaus., S. 337 (譯第一卷第二册一六三頁)

27) a. s. O., S. 337

潤が存在するといふこと、換言すれば「没した勞働」の價值でなければならぬ。故に勞働力の價值よりは小さくなくとも、その勞働力によつてなされる勞働よりは小さいといふことは、原則としてありうる。されば「機械の價值と機械によつて省かる勞働力の價值との差によつて設けらるる」所の資本家的生産方法の下に於ける機械の使用限界は「機械そのもの、生産に要する勞働力が、その使用によつて省かれる勞働力よりも小さい點に存する」所の社會主義的生産方法の下に於ける其の限界よりも、遙に狭いと言はなければならぬ。

尙ほ此の事を説明する所の彼自身の言葉を用用する。そは一層明瞭に機械の使用に及ぼす勞賃の影響に關する彼の見解を傳へるものであらう。

『勞働時間の必要勞働及び剩餘勞働への分割は、國によつて異なり、又同じ國內に於ては時代によつて、或は同一時代に於ては産業部門によつて異なるものであるから、又勞働者の受くる實際の勞賃は時には其の勞働力の價值以下に下り、時には其の勞働力の價值以上に上るものであるから、そこで機械の價值と機械が代るべき勞働力の價值との差は、例令機械の生産に必要なる勞働量と機械が代るべき勞働の總量との差が同一に止つて居る場合でも極めて變動し得るものである。然るに資本家自身にとつて商品の生産費を決定し、そして競争の強制律によつて彼に影響を及ぼすものは、單に此の前者の差のみである。故に十六世紀及び十七世紀に獨逸が、單に和蘭に於てのみ使用される諸機械を發明し、又十八世紀に佛蘭西に於ける幾多の發明が、獨り英國に於てのみ使用された如く、今日の英國に於ては北米に於てのみ使用される諸機械が發明せられるのである。』 (完)